

CVVな男たち

土木と格闘したお話 15章



池亀 建治

撮影 小椋 勉

土木施工技術者としての職業を選択し以来30数年間、“社会に役立つ”ことを目指して土木界で取り組んだことを記述して、後輩の土木関係者に一つの時代と直面した施工技術者がどのように立ち向かったかのメッセージを伝えたいのと、併せて、還暦を迎えた自分自身としても土木屋としての総括としたい。

目次

(上編) 私と土木の美しい物語 2 ページ

憧れ 夢を持って修業した丁稚時代から一人前になった楽しい時

- 1 馴れ初め
- 2 技術者としてのプリンシプル
- 3 いきなり 上司の死亡事故で始まった現場 厳しさ
- 4 土木工学 原理原則の重みと面白さ
- 5 現場には二匹の魔物が住む
- 6 夢のような 現場
- 7 建設会社の豪快さ

(中編) 土木と私の重い関係 8ページ

土木界はとんでもない怪物であることが、徐々に解りながら、無謀にも立ち向い格闘した時

- 8 施工技術の価値
- 9 施工技術者として社会に役立つことはできるのか
- 10 思いがけなくビジネスマンに 世の中 金 金 全て金
- 11 土木界へ疑念

(下編) 土木の新しい道を求めて彷徨いつづけ 12 ページ

もう一度自分として、土木がなにだったのか、新しい道へ踏み出し、振り返る

- 12 異なる場面で土木を見つめて
- 13 新しい道への挑戦
- 14 縁あって土木界に身を投じて
- 15 そして これから 全てを賭けて

上編 私と土木の美しい物語

1 馴れ初め

高校時代の私は音楽に陶醉し、トルストイのアンナカレーニナを寝食時以外の時間を全てつき込み一気に読破するほど読書好きであった。卒業前の将来の職業選択をする際に、当時暗い性格で人と旨く付き合えない傾向があったので、それでもできる仕事として土木技術者を選んだ。もちろん、社会に役立つ仕事であれば将来も食いはぐれないだろうと考えた。田舎であり情報はほとんどなく、土木のことは全く知らないままに、誰に相談することもなく、思いつめた形で道を選択することとなった。当時熱中していた吹奏楽の延長での音楽関係の仕事が若者らしい憧れであったが、音楽大学に進学した仲間もいたが、私には音楽的才能が全くなく、進路としては夢でしかなかった。

青臭く理屈好きな私が職業の選択のコンセプトとしたのは、“社会に役立つこと”であり、具体的には“土木技術者となって自分の作ったダムの上でトロンボーンを吹くこと”と設定した。人生の節目において、私はこのコンセプトをもとにして、思考し判断を行っていくこととなった。さらに結果的には、土木界には“社会のため”との共通の思想が底流に強くあり、一層強く私自身もこの点には拘って行動することとなった。



田舎で世間を全く知らずに青臭く選んだ職業である、土木をひたすら信じて社会に歩み出し、土木界と格闘することとなった。しかし、このコンセプトは理屈でしかなく、役立つべき社会がなにか、土木がどのようにして社会とどのように関わっているか知る由もない。この観念先行が柔軟性を欠いた生き方となりわが身に降りかかった。

2 技術者としてのプリンシプル

なんとか昭和40年地元山口大学土木工学科に潜り込み、昼夜を逆にしてひたすら専門外の本を読んで過ごしていたが、戦後の高度成長期の終盤であったことが幸いして、就職環境は非常に良好であった。人生の具体的コンセプトとしていたダムが造れる会社を目指して、同級生が誰も希望しなかったおかげで、鹿島建設に入社することになった。就職選定の教授との懇談まで、私はこの会社の名前を知らなかった。大きい会社だからといわれて入っただけである。

大阪に配属になり、高度成長の余韻を残す都会の激しさと、生来の粗雑で激しい性格が災いしながらも、余分なことを考える間がないほど働き、なんとか“飯喰う”ことは確保できた。最初の5年は設計課において、設計教育を受けながら、企業人のあり方を教えられた。業務内容は戦後の高度成長期の終盤であり、工場機械装置基礎、造成工事計画、造船所ドックなどの設計を行っていた。土木設計を建設会社で行うことは必ずしも確立していなかったため、上司も含め勉強をしながら実務をこなしていた。その時印象に残っているのは、技術はごまかしが効かないので、原理原則を見出し、どのようにそれを現実に適用するかが激しく議論されていたことである。

このような中で社会人としての教育とともに、技術者としての科学的姿勢を教えられるとともに、プリンシプルを貫く魂を植え込まれた。厳しく激しい期間であったが、職場は全体に将来に向かって夢を求めている一体感と充実感があり、成長している社会を支えているとの雰囲気が漲っていた。

3 いきなり 上司の死亡事故ではじまった現場 厳しさ

その後、5年遅れの新入社員として、造成現場に配属となりいきなり、2ヶ月目に上司がブルドーザーと生コン車の間に頭を挟まれ死亡した。一人で応急事故処理をする局面をいきなり迎え、現場の厳しさを思い知った。

この経験は7年後、初めての役付きで担当したダム現場で大いに役立った。超大型ゲンプが転倒する、原石山で大型コンプレッサーが炎上して山に延焼し始める、細い急な坂の工事用道路で生コン車が積載したまま傾き動けない、大量の不発火薬が発生し志願者数名で自らも加わり命がけで3日がかりの処理、発破の失敗で岩石が大量に飛び、隣工区の大型水路壁の検査終了後の鉄筋をなぎたおし、100名近い鉄筋工を近傍から集め徹夜で修復し何もなかったように復旧、こんなことを先頭に立って指揮して処理できたのでした。最も厳しかったのは現場で碎石を作るクラッシャーの中に作業責任者が頭から転落、頭を機械の深いところで挟まれ逆さまになっているのを、元救急隊員の大工と二人で引っ張り上げ私自身が血まみれになった。それに引き続き、翌日からの労働基準局の手入れに備え、飯場の作業員を総動員して徹夜で広大な現場中の問題箇所を暗い中手直しをした。温厚な所長に代わって全て私が指揮したと若気の至りで、当時は自分では思っていた。その後、身から出た錆、詳しく言えないが、自で酷いことにてなり以後地獄の一年となって、愚妻をはじめ多くの人々に救われてようやく立ち直れた。最高に暗い1年であり、その試練は私の性格を大きく変化させた。身から出る錆がどんなものかご興味ある方、修羅場の裏話と併せて、個人的にお話させていただきます。



兵庫県権現ダム

修羅場では人は激変する、これは先天的才能であると思う。日頃元気のいい人や優秀な冷静そうな人が“うる”が来て何も対応できなかつたり、“でくのぼう”社員が沈着にポイント見つけて対応することもある。

最初の現場の悲劇から、常に非常時が頭の片隅に浮かぶ習性がついていた。このような経験から、危険、修羅場は好きではないが、何が起きても“大体どうにかなる”との自信は得られた。

とにかく現場を替わるたびに知らないことだらけで常に白紙の状態から始まるという思いはあった。心かけることは素直な気持ちで知っている人から、聞きたすことである。そして原理原則はなにかを考え、繰り返し思考し、工夫を粘り強くすることであった。最大のポイントは判断することを先延ばしすると事態がもっと悪くなる場面では、勇気をもって判断を下し、失敗を考えず、自ら現場に立ち、大声で自信を持って指示をすることだと思った。

4 土木工学原理原則の重みと面白さ

放射線を使って盛土管理する方法が開発され、新入社員として放射線取扱の国家試験を取るはめになった。その後担当した現場において盛土の密度管理として放射線を使った管理法が採用され、手間と時間のかかる従来の砂置換法に比べて、短時間で多量データが現場で直ちに採取できた。すると対象が土という自然そのものであり当然データは非常にばらつく、そのことでデータのばらつきを考慮していない従来の管理基準が大きく揺らいだ。大きな問題となり監督側行政とともに大学の先生も巻き込んだ議論となった。自然界を相手に科学技術を適用する難しさを知り、また面白さも経験した。この過程から現場では社員は勿論、重機オペレーターまで巻き込んで土を締め固めることに関心が集まり、大変よい品質の盛り土が効率的に施工できた。



生コン打設方法において現場で私の経験不足を、見抜いた現場下請けの工長さんから、俺に任せなければ必ずジャンカがなく、美しいコンクリートにして見せるから任せてみてくれ、との申し出があったので受け入れた。結果非常に良好であった。まだ土木界では品質については寸法検査に合格すればいい程度の認識であり、あまり関心を払わなかった。それ以後コンクリート作業の重要性と面白さに取り憑かれた。作業状況の観察と議論そして現場の作業当事者も含め生コンプラントメーカー、ポンプ車オペレーター、パイプレーター作業員、大工などと打ち合わせを行い、繰り返し試行の上、結論を得て、作業標準を見直して大変に良好な結果を得た。クラックの発生しないコンクリートであるためには、先ず理論的見地からはスランプを抑えることであるが、作業との兼ね合いでスランプ 10CM が適切であると判断した。生コンクリートも砂と砂利とセメントと水から組成されている、盛土管理の経験から締め固めることが最も肝要であると考えた。しかし、ポンプ車の性能が向上し、打設速度が飛躍的に向上していたにも関わらず、パイプレーター作業で行う突き固めが追いつかないということが、作業員の声から判明した。ただそれだけが問題であり、生コン搬入速度を時間的にコントロールすることが、突き固めを確実にできるポイントであった。締め固められた質実なコンクリートにはクラックが入らない、これは土木学会標準仕様書に書かれている原理原則であった。

盛土、コンクリート打設という作業は土木にとって基礎的な作業であり、工学的にはすでに大半が解明されているが、実際の作業にその原理原則を適用することは、結構困難である。特にコンクリート打設作業は元に戻れないとこも厳しい条件である。技術者が体で原理原則を理解することが肝要であると思った。

また現場作業では思いも掛けないことが、よく発生するがそれにも妥協せず、適切な判断が求められる。入社当時の設計課で教えられた土木技術プリンシプル魂を貫くことと、修羅場で訓練された冷静に思考し、判断することが施工技術者には重要であると思った。

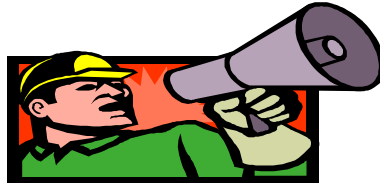
5 現場には二匹の魔物が住む

現場の楽しさは、多くの人々の力を結集してものを作りあげる楽しさと、工学を武器として自然界と直面してその一部を我が物にする楽しさがある。しかし、ほかに人間の本能に迫る魔物が二匹すんでいる。人を支配する快感と、物欲のそのもの権化、すなわち巨額な金と、それにまどわりつく有象無象である。

現場指揮者として爽快さとも言える快感は、若くして現場の指揮者となれることである。造成工事、ダム

工事において体験した大型重機が、自分の思うように動き回り、地を揺るがす発破も自分の命令で点火される爽快さであり、優越感である。まさに輝いていた。調子にのり過ぎ“コンピュータやぐざ”と悪口を言われ、判別半ばでありながらの若気の至りでそのために、多くの方々につらい思い、いやな思いをさせた。

しかし、一度味わうと止められない快感であり、自分の立場、能力を忘れさせてしまい、過ちを犯す。のちに管理部門に配属になり、150箇所くらいの現場を訪問する機会を得たが、現場指揮者の個性で現場の雰囲気は、微妙な色彩まで刷り込んで真っ黒からバラ色まで全く異なることを知った。



工事現場では、個人として日常扱うお金より、はるかに巨大な額のお金である工事費用を扱うことになる。現場において責任者になると、実質の決済が可能となり、買い付けする材料関係の商社、商店や、下請けの業者などとの取引関係のなかで、いかに大きなお金を扱っているか感じる。担当者の工事原価予測をもとに市場原理や社内査定などを考慮して、それぞれの業者とネゴシエーションを行い、価格を決定する。このネゴシエーションにおいて、口頭で行う条件づけが、実際の施工時の工期、品質、安全を大きく支配する。これらの発注が終り、現場作業も軌道に乗ると、現場での利益の見込みが立つことになる。と、その時が現場責任者として現場全てを支配していると思う、たまらない快感である。あたかも、利益を全て自分で稼ぎ出し、その利益が全て自分の物と錯覚し、大金持ちになった気分である。錯覚の段階では頑張っているための動機づけ程度であり、本当のお金の魔性に比べほのかな香り程度でしかない。しかし、真にお金が魔性を発揮するのは、それから先である。現場経費といわれる中に公私の区別がつかなくなる、怖い怖い魔物が潜んでいる。これから先は時代も変わったし、記述を控え、ご想像にまかせよう。

いずれにしても、これらの匂いを嗅ぎつけて、有象無象の人々が、涙ぐましいというか、人間の物欲そのものが続々に姿を変えて現れてくる。しかし、これらは現代社会の活力そのものであり、自由主義、資本主義が世界を圧巻している根本的理由であろう。でもこの流れだけで本当に人々は幸せになるのかなーと思う。

6 夢のような現場

比較的現場経験は少ないが、夢のような現場に3回も廻り会うことができた。

最初は、宮城県沖地震が発生して1ヶ月目に命じられた、仙台付近石油プラントの復旧工事の応援である。気候のよい夏期の3カ月間仙台近傍に滞在することになった。東北人特有の純朴で優しい所長からの勧めで、妻を呼び寄せることになり、日本三景の一つである松島の近くに4畳半の部屋を提供してもらい、マンガで見る同棲時代のように、家具はテーブルだけの生活することになり、夜な夜な松島の日々変る景色を楽しみに散策に出かけた。現場は地域で選りすぐった“出稼ぎに出向かないで済む”優秀な作業員に支えられ、工期は所定の半分で終り、施主に大層誉められ、火事場泥棒のように儲かり、現場所長の連日の接待を受け、終了時に過大な礼状を大阪支店幹部宛にいただいた。さらに夏休みも貰い、二人で東北半周の観光ドライブで過ごし、帰りは太平洋航路で帰阪した。

次は大阪府忠岡町沖の大型広域下水処理場建設現場でのことである。その場所は埋立地で途方もなく広大でありゴルフ打ち放し場を先ず作り、テニスコート、卓球台2台、周辺は海での魚釣り、スポーツアイランド状態となり、20名位の社員が各種の大会を企画し、日々休憩時間、業務終了後楽しく、遊んだ。当然現場も順調そのものであった。なんでもない建設現場らしいおおらかで平凡な幸せな時であった。



オーガスタナショナルクラブ12番ホール

写真提供 (株)小学館プロダクション PHOTO By 小林 滋 三洋電機広告より

極め付きは、鶴見花博でのオーガスタナショナルクラブ12番ホール再現というパビリオン工事では、土木構造物を見せるために作り、開催期間中芝生の管理をする、という珍しいものであった。施主は電通であり、A4版数枚の企画書で、事業費3億円を企業から獲得できる、これまた世にも類稀なる会社であった。直接社会に役立つとかではなく、博覧会のダシモノとして、電通中尾局長という一人の人が思いついた、単なる思い付きプロジェクトである。最近知ったことだが、この電通中尾さんは、ゴルフ狂で仕事も趣味もゴルフ三昧だったらしい。このことが、ゴルフが好きという特定の嗜好の人々に大きな感動を与えた。一人の人が多くの人に感動、夢を与えるには、その個人は人生賭けて取り組まなければならないことを改めて感じた。

しかし、このプロジェクトで現実に発生したことは、日々天国と地獄の行ったり来たり、ドラマ的事象の連続であり、簡単には語りつくせない経験であった。世の中にこんな世界があるのか実感した。例えば、ゴルフ好きな方だったら、びっくりでしょうが、あの憧れのオーガスタナショナルクラブのチャンピオンズルームで“おしっこ”をしました。勿論トイレですが。さらに、私がオーガスタに残り働かないかとの誘いを断らなかったら、私はオーガスタナショナルクラブの職員になっていたかも知れません。迷いは続き、帰国途中のワシントンのホテルからオーガスタに戻るか、一晩悩んだ末、予定どおりニューヨークに一人で行きました。

なにやかや、土木とは別世界のことが大半なので、“認知”が残っている間に、私のブログでもいつかまとめたものを書き込みたいと思っています。しかし、超一流のゴルフ界をかいま見て、私はお付き合い程度のゴルフを一切止めて、老後はゲートボールをしようと思った。



まつたけ

番外編 秋になると思い出す現場、滋賀県近江山中でのウイスキー貯蔵庫造成工事の現場では、秋は野外すき焼き大会が数度開催された。現場場内から“まつたけ”をゲット！近隣屠殺場から近江牛を調達、地元作業員からのご寄贈野菜、そして既存貯蔵庫から漏れ、常に漂うモルトの強い香りに酔いながら昼から楽しい宴会でした。

建設現場を変えるたびに、その地域の風土に触れ、特に地元の人々と接して、それぞれの地域にはいい思い出が残っている。そして その場所にいつ行っても、建設した構造物が残って出迎えてくれる、こんな仕事はそうはないと思う。ダム技術者の物語 三島由紀夫の“沈める滝”ほど華麗ではなかったが。

7 建設会社の豪快さ

現場では多くの人々が、いろいろな形で工事などに関わる、それはかなりの工場をいきなり作るようなものであり、ほとんどその現場で初めて顔をあわせた人々であり、人数的に多いだけでなく、多くの“種類”の人々の集合体である。

現場で支えてくれる作業員、工長、下請け社員、下請け親父、納品関連多くの商社、業者、迷惑をかける近隣住民、関連“地元”、施主もさまざま、怖い時には怖いが優しい時には優しい関連諸監督官庁、警察、消防、救急、労働基準局、たまに指導を受ける学者などなどであり、これらの関係者を全て束ねながら現場は運営をすることになる。自分が住んでいる付近で建設現場を見ると感じるが、技術と金に任せとんでもないことを仕出かす会社である。

社会ではスーパーゼネコンは世間からは、怖がられ時には嫌われている。しかし、個人的に話をすると大半の人々は一目おいて評価をする。その理由はよく解らないがどうも業務内容が激しく、ずいぶん、人間的に鍛えられた集団であることへの評価と思える。このことは具体的には、逞しき、幅広さ、腰が低い、粘り強い、決断が早い、厚かましい、覚悟ができていて、交渉が旨い、リーダーシップがある、世間ずれしている、銭勘定ができる、工夫ができる、声大きい、などではないかと思う。

これらのことが、建設会社は、傲慢で、なにを仕出かすか解らない、また何でもしてしまうという印象をあたえているが、しかし実際には、一人一人は物分りがよく、包容力があるといわれるのが一般的ではないだろうか。

中編 土木と私の重い関係

8 施工技術の価値

淀川に架かる鉄道トラス橋を仮線の鋼鈹桁に、一晩で架け替える高度な技術を要する工事を担当し、深夜に一月に一回のペースで4回行った。あらかじめ綿密な計画により、予行演習も実施し、緊張のなかで初回の工事を行ったが、幾つかのトラブルが発生し始発電車直前まで時間を費やした。2回目、3回目と重ねるとともに時間は短くなり、なんと、4回目の時間は半分しか要しなかった。作業員だけでも可能なくらいの作業となってしまった。このことは技術の意味、価値を示していると感じた。



今では土木技術は、社会的必然もなく、飛躍的に進展はしていない、併せて、作業員は非常に優秀である。施工技術者として、通常の現場を担当して経験を積むと、現場で取り組む技術的要素は薄れていることに気がつく。すなわち施工技術は施工前に工学的知見を持って、事前に計画を立案し、それを現場に具現化することである。施工が繰り返され作業のレベルが上がると、工学的知見の比重は低下する。すなわち作業の要素が強くなり、技術者としてあまり興味のあることではなくなる。残ることは商売を目的とするマネジメントの色彩が強くなる。

常に自然と直面し、技術力で対応し、工夫し続ける面白さ、仲間とともにものをつくる喜びは常にある。さらに多くの建造物は想定されたように使われて、社会に役に立つことも事実であり、それを建設することは社会的に価値がある仕事である。

しかし、なぜか、私自身では心の中で、もう一つ施工技術者では充足できないものを感じるようになった。理屈っぽく言えば技術者としての“創造的価値”が思ったより少ないこと、技術の比重が低ければ、それ以外で現場の使命である“お金儲け”に重点が移ることになる。これが施工技術者の夢と合わなかった。その頃、偶然管理部門に配属されて、新しい局面を迎えることになり、さらに“お金”ヘドロの深みにはまることになった。

9 施工技術者として社会に立つことはできるのか

ちょうど施工技術者としての自信をもて始めたころ、会社において青函トンネル工事初代竜飛岬側の現場所長として、歴史的な難工事を軌道に乗せられ本社に栄転された課長を、本社技術部課長連中が、世界有数のトンネル施工技術者として尊敬のまなざしで見ていることがあった。だがそれから数年後、青函トンネル完成直後からその使い方が、本来の目的である鉄道として役立たないということで問題となり、埋め戻す、マッシュルーム製造工場にするなどといったとんでもない議論が、かなりテレビや一般紙で報じられた。施工技術者として一流となり、社会に役立つことを人生のテーマとしてようやく、歩み始めていた私には大変ショックな事柄だった。

その後現実としても私もこのような問題に巻き込まれることになった。私の夢だったダム現場に、若手管理者として配属となり、高校時代のコンセプト実現の機会を恵まれ、昼夜を分かたず張り切って心血を注いだ。その兵庫県企業局の権現ダムは本来の目的である、製鐵所用工業用水を供給することが中止となり、不要となって完成後数年間は水を貯めることなく放置されていた。その後その目的と全く違いほとんど機能的にも無意味に近い、ダム周辺の道路を自転車道ということでようやく貯水された。時代の変化により、やむを得なかったとは思いますが、やるせない感情は消し難い。

高校時代に想定した夢は、自分の作ったダムの上でトロンボーンを吹くことであつたが、ダムの貯水を知って一応その時を迎えたので、下手なりに演奏してみたがもう一つ満足はできなかった。

そして田舎の若者の夢である、ダムをつくる土木技術者の夢は虚ろとなった。

施工技術者では手の届かない、はるか上流で物事は支配され、大いなる無駄な公共事業もありそこで心血を注ぐことは、一体なんの意味があるのだろう、報われるのだろうかとも思った。考えすぎではあるが――

後日管理部門で多くの受注した工事を知ることになったが、このような疑問がある工事は、詳しく検証をして見ないと明確ではないが、少なくとも2割程度あると思った。すなわちこのことが公共事業のあり方が、社会的問題となっていることと繋がっているとも思っている。

普通ではないかも知れないサラリーマンである私は、私のコンセプト“社会に役立つ土木”実現ため、業務命令を2度拒絶した経験はある。この件では幸い恐れたほど、あまり“身から錆”の出ない結末を迎える事が出来た。

10 思いも掛けなくビジネスマンに 世の中 金 金 全て金

口は災いの基、現場の責任者となってから、会社の管理部門に常に逆らい続けていた。と、なんと逆手を取られて、じゃーお前がやってみるとばかりに管理部門に配属されてしまい、企業としての営利追求の第一線に放り込まれた。現場で昼夜を忘れて働く社員を、さらに励まし、競争させ、より一層の利益の搾り取る役目であった。併せて、受注時の特に入札の責任の一旦を担うことになり、本社中枢とも繋がり、日々、瞬間瞬間において身が縮む思いで行う業務であった。具体的には年間1200億円(JV 総額)を超える工事の内容について把握することになり、入札、利益査定、施工計画、実行予算などの審査、人事配置などが業務内容であり、さらに現場管理に関する方針立案などの企画業務も範疇に含まれていた。



しかし、実態を知るに従い、建設業には問題が山積していて、土木業界はまともな世界とは思えない状況と解った。具体的には、入札業務は談合担当と連携が日々の実務であり、入札価格は非合法的な情報漏えいに頼り、落札後は地域の普通でない業者が群がり来る、裏金、社内営業などなどなど。一方では

大半の現場社員は、現場で夜昼なく厳しい状況のなかで、確実な施工と利益捻出に懸命に汗を流して働いている。その時期は、バブル末期であったが社員は同じ数で、150%の工事を受注して施工を行っていた。現場での事故も多く社員も疲弊し、病気、アルコール中毒などもかなり生じていた、一方会社は膨大な利益が上がった時である。この利益はバブル崩壊とともに、不良債権化し文字通り“泡”と消えたが、経営者は誰も責任を取らずに終わった。

私自身、この場面からの“脱走”も試みたが、工作が露呈し連れ戻され残りの“刑期”を言い渡され、金にまみれた日々を過ごした。談合事件が発覚し“看守”が手一杯で監視が軟弱になったことをきっかけに、“大脱走”を成し遂げた。この業務にほぼ七年近く関わり、その間に建設業を通じて、社会に対して視野を大きく広げることになった。それより世の中のもの、裏の部分も含めて実感として理解できた。生き馬の眼を抜く世界であるゼネコン業界においても、この時期は最盛期であり、全般に勢いよく、激しかった。しかし、全てはやっぱり金でしかなかったのではないだろうか。私は共産主義、社会主義は大嫌いであるが、この風潮は資本主義、自由主義の一つの極みである。人間というものなかなか平穩に暮らせないものだと思う。

社会に役立つでなく 会社に役立つはめになった。

(なぜ “会社”と“社会”は同じ文字で構成されているのだろう)

会社の価値基準が余りに単純化され、利益だけに収斂していることが問題である。

またしても、田舎の若者の夢は、はかなく潰えた。

11 土木界への疑念

長年社会問題となっている談合と関連する業務に深く関わることになり苦しんだ。あまりここで記述することではないが、この土木界にとって残念なのは、事態を隠蔽し、世間を欺き、しかもそれが土木界全体の主流であったことである。言い換えると、違法であることを認めながら、社会には談合していないと嘯いて、それが企業活動の基盤であって、一部でなく全部であったことであり、大変根深い深刻な状況であった。

談合そのものかなにを、建設会社に及ぼしたかといえば、建設会社は技術力が商品であるにも関わらず、受注は談合という別の枠組みで決まるため、技術者として技術力の評価は相対的に低く、施主が受注企業の現場施工状況を高く評価しても、次の受注にはつながらない仕組みである。会社全体がそうであり、技術者の個人の評価にも色濃く反映していて、技術者の尊厳をないがしろにして、単にサラリーマン的であることが社内で重要となっていた。



驕る平家に悲哀を味わうこととなった役人、貴族、武士らが
平家打倒の陰謀を企てたお寺への坂道 談合坂。

思いもかけないで、企業の中核である支店土木部に配属され中核課長として、必死で実務に対応しているらうどその時、談合事件が発覚して大問題となったが、一時期を過ぎると全ては元どおりになり、懲りない人々に再び支配され、逆に改革の芽は摘まれた。日常関わり深かった傲慢な談合担当の幹部に、一人で立ち向かって“クビ”になりかけたこともあった。しかし職務が長くなると、結局土木界の裏世界にも習熟し、正義感あふれる私の心意気も麻痺し、サラリーマン社会のはかなさを、日々味わうことになった。大人の社会であれば、裏も表もあるのはいいが、裏が表を支配していた体質は容認しがたい状況であった。談合がこれほど根深くなければ、土木を離れずに建設業と関わりを持ち続けていたであろうと思われ、このことが自分の会社人生で最も悔しいことであった。

それに加えて公共事業のあり方の問題である。鉄のトライアングルと揶揄された土木界全体は、本来の社会資本整備の観点からずれながら、景気浮揚、内需拡大の道具として、公共事業が増大の道を一途にたどった。その結果、過剰なまで活況となってしまった公共事業のあり方が、いろいろな事象から社会問題化され始めていた。

また発注者である公共団体も、自らの利便を意識して知らないふりをしていることで、さらに事態を悪くしている。建設業者として仕事の割り振りは、現実として合理的な側面がある。だからこのことを前提とした社会システムを構築すべきであった。本社でも本気で検討されたことはあり、私も中堅社員として検討会に何度か参加したが、結局もみ消され、うやむやになった。さらに国民を裏切り、建設費のつり上げでほぼ2割から3割を、建設業界は不当に獲得し、税金を無駄にした。総額は膨大であり、無駄な公共事業とともに国家財政が困窮している一つの要素となった。

3割儲けたって、あれだけ苦勞して働いたのに、赤字を避けるのが精一杯だった、不当利益を盗んだって許せないとの声が何処からか聞こえて来ます。土木界に競争原理が作用したと想定すると、建設業界の構造改革がされていない、生産技術開発が真剣にされていない、不要な会社経費、発注者行政との重複管理などを考えれば可能と考える。多くの予算書を査定し、現場の結果としての利益を見ていると、大きく建設生産状況が変われば、やり遂げられたと考えていた。

それから20年たって、ようやくこの問題が業界からも解決の意向が示され始めたようであるが、時すでに遅く、公共事業が急速に減少するなか、建設業は社会的にほとんど信用をなくし、全く次への望みもなく、混乱の中で日常業務が進んでいるようである。長年にわたりほとんど有効な改革がなされなかったために、土木界の苦渋はまさにこれからのほうが深刻で正念場であろう。

競争が激化すれば、金金ビジネスマンと技術開発とそして公共事業、社会資本としての責任や品質確保とのバランスを見出すために、発注者の変革とともにかなりの年数を要するであろう。

この項は一緒に働いた方々に対してもまた、広く同業者のなどの関係者に対して、丁寧に説明し、意見交換をすべきであるが、またの機会としたい。

下編 土木の新しい道を求めて彷徨いつづけ

高校時代に土木を選んだ時のコンセプト“社会に役立つ仕事 土木技術者”をめざして、無我夢中で取り組む中で、目の前の課題に対応していると、結果として新しい道に入り込んで行った。その経緯と状況から土木界の問題を指摘し、今後への方向を見出してみたい。

12 異なる場面で土木を見つめて

企業活動の中核にいて遮二無二働いているとき、土木学会活動としての“土木と社会の関係を考え直す会”（FCCW）と偶然関わり、その会では内なる啓蒙ということが提唱され、自分自身も大きな影響を受け変化できた。立場の違う優秀な多数の土木技術者と、相互に非常に業務多忙のなかで、長い間行った活動であり、思い出せないくらい、多くの篤い、楽しい出来事があった。際限ないほどの想いと、言いたいことがあるが、始めと終りの出来事だけにとどめておく。

20数年前関西の土木学会関係者だったら、真っ赤な表紙の“どぼく とおく”という本が出回ったことを、ご存知かもしれません。これが FCCW の最初のイベント記録で、内容は土木界の恥部を楽しく、えぐりだしたものです。私は当時土木界の恥部で日々働いていましたので、内容が会社幹部に知られないかひやひやしていました。それ以後、ほぼ7年間、中心メンバーの一人として、仕事の合間に活動を続け、多くの人と知合いになり、多くのことを学ぶことができた。

最後の半年間は阪神震災発生後の時期にあつて、関西土木界が震災復旧関連でとんでもなく多忙であつた。FCCW としても具体的に行動しようと20数名が、地震災害復興の方向を見出すために、1年前に地震を経験していたロサンゼルスに学ぼうということになり、南カルフォルニア大学で、2日間の国際シンポジウムを行うことになった。メンバーが直接的にアメリカ側の出席者と連絡を取り、さらに旅費を節約するために旅行の準備も全てを自らで段取りした。実質責任者として、業務はほぼ2ヶ月放り出して、ネットワークと拙い英語とを駆使して、ほかのメンバーも夜も寝ずに頑張つて段取りを行い、アメリカ側も大学先生、州政府土木幹部、震災経験した二世などの出席を得て2日間、パーティーも含め多くのことを議論できて大成功であつた。そのことはNHK ニュースでも報じられた。今、考えてもなぜあんなことが、成功したか不思議である。震災で関西全体が興奮状態であつたこともあるだろうが、ネットワークによるシナジー効果、つまり、1プラス1は2でなく10となつた瞬間であり本当に感動した。

これをきっかけに過熱気味のFCCWの世代交代を、リーダーだつた京都大学 河田恵昭教授に提案し受け入れられた。その時の条件が、先生が温めておられたCVV構想の活動に参加することであつた。CVVの遺伝子にFCCWの篤い想いが組み込まれている。CVVでは志の篤い部分は構成メンバーの年齢に比例して薄められているが、組織運営的方法の根本であるネットワークの凄さはさらに、上質になって継承されている。



河田恵昭教授

企業という強い枠組みの外での、これらの議論、活動は大変刺激になり、以後の考え方、生き方に大きな

影響を持つことになり、篤い想いを共有した人的ネットワークとしても素晴らしいものが得られた。新しい道を自ら踏み出す勇気を蓄えられた時期でもあった。

13 新しい道への挑戦

管理部門での、土木界での矛盾の多い業務を担当する途中、埼玉談合事件が発生し検察庁特捜部の手入れが、私の机にもおよび大変惨めな思いをした。その後、この業務から一度“脱走”を試みて連れ出された時、言い渡された“刑期”を終るころでもあり、これを期に強引に希望を貫き、土木本流から離れ、建設受注をも目的として、施主に企画提案を行う建築関係の部署に配属してもらった。将来受注の方式が大きく変化し、土木の受注も自由競争となり、民間会社として建設会社の企画提案が施主、行政にも必要になるとの思いもあった。民間企業に対する建築の営業にも関わりながら、ほとんど事例のない土木関連の提案を行った。鉄道高架橋の景観、大型プロジェクトにおいて IT 技術を使った施工手順分析などを、企画して営業をおこなった。部署を移って、1年目に阪神震災が発生した、復旧工事だけでなく、震災復興に社会貢献として会社が関与すべきと、強く申し出て本社から重役を向かえ、復興本部を設立することになった。しかし、社内の意向は、別な方向を向いていてあまり神戸復興に寄与できなかった。

ここで見つめた事象には疑問が多かった。本当に会社は社会に向かって正面から取り組んでいたのか、神戸震災では社会貢献ということで、復興本部まで立ち上げてもらったが本音は復旧工事の受注活動の枠組みを超えることはなかった。あのような状況でも、社会貢献という言葉をせせら笑う幹部もいた。

バブルも崩壊し、いつまでも光明が見えない中、少し世の中が変り始め、公共事業に関して官から民への動きが生じ始めた。大阪府からの働きかけで PFI と直面することになり、公共事業発注の新システムとして期待しながら、積極的に社内外に働掛け、実際の動きになっていった。関西の初期の PFI 事業に関与することになって、以後幾つかのプロジェクトを担当したが、社会に直接事業を通じて関与するのではなく、依然として建設会社にとっては単なる受注活動でしかなかった。

建設会社において土木という建設会社の本流から離れて、物足りなさもあり、自分個人として違う形で、社会に関わりを持つことに挑戦しようと、55歳となった時に3年前から想定していた早期退職をすることにした。前職の流れを断ち切るために、退職した後に次の働き場所を決めるという無謀な行動をとった。知り合いの大学教授などが社会に働きかけをしている活動に参加することを目指した。いくつかのことに関わったが、主に関与したのは NPO 法人日本 PFI 協会の職員として4年半勤務した。



PFI は民間企業がより強く関わることで、社会資本をより低い財政負担で充実させる手法である。地方自治体担当者とかかなり多く意見交換を行ったが、PFI の手法は一つの方式であるが、地方分権が確立して地方自治体がさらに強く、主体性を持たなければ従来の流れとはあまり変ることではない。さらに PFI も行政が主導で進める公共事業の推進方法であり、行政に民間の力が理解されるとは思えない部分もある。さらに発展した形も必要であろう。これらの活動を通じて思うのは、少々飛躍的であるが国家財政は、行政のこのままの形が保持され続けると破綻・崩壊状況に陥る。行政としての公共性の高い中核の部分だけは強固に残し、多くの部分は、民間企業とともに、市民活動と融合して公共事業を進める事によって、それが社会を再建さ

せる。そのうちのかなりの部分は、高齢化社会の進むなかで、高齢者が公共的観点を明確にもって、社会を支えるのではないかと思う。CVVのような活動も一端が担えるのではないかとも思う。

14 縁あって土木界に身を投じて

NPO 活動をご一緒していた10歳先輩の土木技術者の方から、“君は仕事に何か満足できないままだったんだなー、僕はもう十分満足したよ”と言われた。今、還暦を向かえたこの時に、“この CVV な男”をまとめるために振り返って見ると、確かに仕事に満足できていないことがあることを改めて感じる。どでかい土木界と格闘した戦記の節目をここでまとめてみる。

仕事の何に満足できていなかったのだろうか。建設業を選択したことが誤りであったであろうか、文系のことに関心があったのだろうかとも思う。実際には音楽や文学関係でやり遂げれば、満足できていたかも知れないが、子供のころ野球をしていて、プロ野球の選手になりたいと思うのと同じであり、よほどの才能がないと現実的には憧れでしかないだろう。

現実を選んだ道の中で施工技術者として懸命に努力した後に、その限界を感じ、土木界の状況が把握できた上で、自らの選択で決別した。対象としての工事としても多くの可能性があり、施工技術者として貫き通すことは選択肢としては十分にあり得た。しかし、わがままとも言えるが、どこか納得できずに方向転換したということは、結果的にこの道には向いていなかったのだろう。

企業の中核に関与していた時に、たまたま新しい局面を向かえたことは、社会と関わり方大きく変え、深めることになった。そこで遭遇した局面の課題こそが“談合”の問題である。時期的にも土木業界のピークの時期であって、それにともないあらゆる面で土木界は活性化していた。

また、全体的な風潮として業界も社会に対して傲慢であり、傍弱無人な振る舞いであり続け、まともに強く世間から非難を受け始めた時期である。

私自身も無我夢中で業務に取り組んでいるなかでチャンスを得て、企画的業務を通じて現状を打破するために、自らの発想を実現させた事項もあった。社員教育に従事して若い社員にもメッセージを発したりもした。会社全体のことも本社企画部と連携して、会社の将来の方向性について中堅社員として意見を具申できたことも数度あった。また建設業界での研究会、FCCW を通じて土木学会にも自分の見解を述べることができた。

この後、大きく30度転進して営業企画部署の配属となった後、さらに30度変身して55歳を期に早期退職して土木本流から遠ざかり、新しい公共事業方式であるPFIに深く関わることになった。その母体は、これまた新しい社会制度のNPO 法人であった。還暦を過ぎた最近また30度変身して、ご隠居の練習に励むことになった。

全て自分が土木界を背負っているような時期もあり、確かにその頃は力が入ったまま過ごしていた。世の中、もっと大きく複雑怪奇、矛盾と課題を超えるには、もっとしたたかに、しぶとく生き抜くべきだった。社会に

役立つために土木を通じて懸命に努力していれば何とかなると、無謀にも小さなひとりがひたむきに挑戦していた。社会というものは、とてつもなく巨大であり一つ一つの経験は、骨身に染みて私に迫って来て、それによって多くを学び、厳しく鍛錬された。土木と社会のかかわりへの不満、田舎で考えた“社会で役にたつ”ことは 青臭く、単純すぎる発想であったのであろう。

15 そしてこれから 全てを賭けて

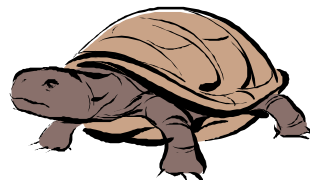
少しその時期をから離れ振り返ってみると、私の命題の“社会に役立つことが”、一度しかない私の人生を支配してきたが、あまり力まず自分のためだけに自分が生きれば、もっと力を発揮できたのではないかも考える。

いつの時代も一人一人は、常に時代の波に流されていく。明治維新の時、体制を変えようと維新を起こそうとした人も、幕府側に立って従来体制を改革しようとした人も、その状況で命を賭けて自分を信じながら、おかれている状況の中で懸命に考え、行動した。また大東亜戦争では、個人にとって選択の幅はほとんどない状況で、さらに大半の人は命を賭して、考え、行動して、おかれている状況で人生を過ごした。我々にも近い戦後のモーレツサラリーマンの世代も、家族を放り出し、健康も忘れて戦後復興、経済成長に邁進した。その時代を継承しつつ、次の時代を模索しつつあった時代の中で、私も決して流れから、外れてはいなかった。本流にいたためにそのもがきは激しくその分、骨身に染みて時代を感じ、知り得た。

明治以来の社会を支え、成長させた土木界を見れば、我々の世代は成長一方の土木界終盤が始まりだした部分を担ったことになる。しかし土木という巨大な産業の衰退期には、多くの痛みがありまだそれは一過程の中盤でしかないだろう。直接そのような場に出くわし、決して醒めていたわけではない、志を持って、熱中して、挑戦しつづけたこと自体誇りである。

私にとって、このことは何であったか。私はこの中で人生にどんな価値観を見出していたのか、そして本当に心から喜んでいたのか。生活の糧だけに留まることなく、そこから一步踏み出した、私の生活と社会的立場が、それなりに確保できたことは誇るべき事実であるが――

修験道の本山の一つである醍醐寺において、同世代の僧侶の法話を聞く機会があった。物を作る仕事は尊い、どんなことをしているかはその人と社会との縁である。自らも多くの人のものづくりとの縁で日々が過ぎせる。互いに感謝しながら暮らせばいいと諭された。



人生まだ還暦でしかない、肩の力を抜いて、今までの経験を智慧に転換して、社会との関わりかたは変化しても、挑戦を続けたい。91歳で近日逝った伯父 宍戸幸輔は私の歳に著した本で、人生は五つに区分され、学習の時期、修業の時期、開花の時期、円熟の時期そして今からの総合審判を受ける時期がある。その変わり目は人生の節であり、その節を迎える時に、二つのことをしなければならない、一つは、過去の人生から完全に脱皮し、徹底した反省と修正をすること、二つ目は新しい目標と堅い決意を持つことであると書いている。

たまたま見つけた文芸春秋の中で堺屋太一は次のように述べている。
定年後の選択の基準は 収入 見栄 好み 三つであり、そのうちのどれか一つを選ぶことになる。堺屋太一自身の提唱は 自尊好縁 —— 自らの考えを尊しとして好みの縁で結ばれた仲間と集い会う —— という考え方である。これがどうも私の考えに近いと思う。

土木界の枠だけにとどまらず、自由の枠が大きくなった今、還暦の年を弁えて、何に時を費やすのか選択の時である。願わくは、これからの私の人生の喜びをかつて音楽・読書に熱中していた十代の頃の自分を再び育み直しながら、二十代で社会に出てから知った人と人との交流の楽しさをもっと深めていくことに価値を見出して生きたい。その中でやっぱり社会に役立てばさらに嬉しい。

私が尊敬する長州人 高杉晋作が結核の身をおしながら第二次長州戦争を指揮し、大島沖奇襲で幕府海軍を壊滅させ、うって帰って小倉城攻略を陣頭指揮し、長州勝利を決定つけた直後、咯血病床に就き 臨終直前にしたためたことば

面白き事なき世をおもしろく

と 立ち会った望東尼が 住みなすものは心なりけり と 付け加えた。

面白いのーと

言って息を引き取った。享年29歳。



幕末の風雲児 高杉晋作

今生まれ変わり 38年後の98歳の秋 紅葉あでやかな箕面の山寺で

こんな想いでこの世とおさらばできれば 幸せである。



なるぞ仙人!

池亀さんのこと

1990年3月31日(土) 11:00～ 国際花と緑の博覧会の開会式が、皇太子殿下をお迎えして開かれました。そして、183日間2,300万人の人々が集い終了しました。

その3年ほど前でした、小生広告代理店電通で、花博の仕事をしていました。

花と緑をテーマにした博覧会と言っても、どの様なものなのかイメージできません。

前例があると言えば、オランダの海岸埋め立て地で、塩抜きのため放置している所でお花畑をつくって催事をしたのが始まりで、英国のガーデニング展がその発展した形であること位しか分かりませんでした。87年4月自然との共生について勉強しようとか言って、早朝に録画したオーガスタナショナルGCで行われているマスターズトーナメントを、朝から会社で見っていました。そうしている間に人だかりが出来ていました。

その時連翹(レンギョウ・英語名ゴールドデンベル)の黄色い花が咲き乱れる12番ホールが映し出されていました。〈そーや、これ造ろう〉ゴールドン・パビリオンが決定しました。色々ありましたがオーガスタGCの許可もとれ造成に着手。

建設は〈鹿島〉現れたのが池亀さんでした。とに角アメリカゴルフ界でもユニークな集団として有名なオーガスタGC相手ですから頭の痛い話が続出、鹿島も好くしたものの建築業界で異例の仕事が出来る人を選んだと思います。ゴルフ場をつくるのではなく、パビリオンをつくるのです。しかも人の目に触れないグリーン下の保温パイプまでもがそっくりに。1900年ポビー・ジョーンズが作った頃の設計図がありませんから測量図からつくる始末。(この辺の話は一度池亀氏に時間を与えれば語るでしょう)

彼は、みんなの用が捗っている時には姿を消し、必要なときにはそこにいる。お話しをしているときは、頭の中で2回転して言葉が出て来るようで分かりにくい。

無沙汰をすると、そっと気になるプレゼント(資料)が置いてある。その間の動向はキチンと認識している。不思議な人です。

CVV初代事務局長の重責を、なんなくこなしたのも、この言動の不思議さと優しい心があるからです。CVVの〈個人の心〉をルールとした気楽な雰囲気は、その辺にも原点があるように思えます。

部外者の私をCVVへ呼んでくれたのも彼です。お陰で楽しい老後生活を送っています。

随分前になりますがCVV総会で、老後生活には〈体力〉と〈知力〉を鍛える必要があると話した事があります。小生にとってCVVは、知を鍛える場です。いい仲間と出会え楽しい活動がいつまでも続くように祈ります。そしてCVVの益々の発展に、少しでもお役に立ちたいと思います。

まちづくりグループ 中尾順二